

## 軍記における英雄像

### The Image of the Hero in *Gunki - monogatari*

山下 宏 明\*

What kind of position might Japanese literature come to occupy in the world's literature? Attention to this question is beginning to play a role in studies on the *Genjimonogatari* and a number of other classical and modern literary texts. In the case of *gunki-monogatari*, (martial narratives), however, this question has not necessarily been accorded due interest, and the effect has been the exclusion of this genre from international studies on epic poetry. It is true that, in the later years of Meiji, and then again during the postwar era, this problem has been the object of some concern. However, especially in the postwar period, such concern has been more or less restricted to studies of historical stylistics. To give studies of *gunki - monogatari* a larger role in the international (comparatist) study of epic poetry, a reconsideration of studies in this genre, with greater attention to the narrative method of *gunki - monogatari*, will be required.

In the present report, as an initiative in this direction, I will consider how the various heroes of "tales of combat" (protagonists of the *kassendan* from which the genre derives its name) are described and what kind of roles they play in the

---

\* YAMASHITA, Hiroaki 名古屋大学文学部教授

narratives. I would like to draw upon examples from the *Heikemonogatari*, in the more or less final version represented by the *Kakuichi* text thereof, together with various early texts of the *Heike*, as well as the *Taiheiki* and other narratives of the *gunki - monogatari* genre. The objective is to understand what kind of text the *Heikemonogatari* is. This should serve also as a step towards answering the question of what kind of role the study of *gunki - monogatari* can play in international studies of the epic.

It is fortunate that more and more outstanding translations of *gunki - monogatari* into foreign languages are being published, and studies in this genre by foreign scholars are beginning to appear, while within Japan, scholars of Western classical literatures are also beginning to show an interest in *gunki - monogatari*, so that the groundwork for the type of reconsideration envisaged here is gradually being laid.

「英雄」を、時代の転換期に生き、集団を率いて時代を動かした行動の主体と考える。軍記物語の最高傑作『平家物語』では、平清盛こそ、その英雄の名にふさわしい存在であるが、今回は、この清盛の死後、東国武士団の攻撃にあって平家一門が没落して行った、その混乱の時代を生き、行動した小英雄をとりあげる。具体的には一谷合戦について、その主役である小英雄たちを、語り手がどのように語り、かれらを物語の中にどのように位置付けようとしているかを考える。

その一谷合戦当時、——今年はその800年目に当たるのだが——から、合戦をめぐって多様な受けとめがなされたと思うが、そのことは、例えば『吾妻鏡』が熊谷・平山の先陣争い、判官の坂落し、重衡の生け捕られたこと、通盛の討死に注目しているのに、『愚管抄』は、判官の一谷攻撃と重衡の生け捕

られたことに注目していること、その他、勇敢な武将として知られた教経の生死をめぐる、情報が入り乱れていたこと、<sup>(註3)</sup>を見ても明らかである。それらを記録する編者の関心如何によって、その話は当然変って来る。それらの理解を琵琶法師たちが物語として作品化した。そこに多様な物語を生み出したはずであり、現にその中の幾つかが諸本のバリエーションとして伝わっている。

その物語の構成法であるが、判官義経が一谷の奇襲をはかって三草山を攻略し、一谷へと向う。寿永3年(1184)2月4日、5日、6日の3日にわたるが、この経過には、軍記物語の常套的な方法に従い日付けを明記している。この一見、記録的文章と見られる表現が、物語を進める機能を有するのが日本の軍記物語の特色である。しかし現在の神戸市の中央に当たる生田と、西部の一谷で合戦が始まると、戦闘が1日で終わったものであることもあって、日付けを語らない。ところで日付けがある場合、軍記物語の原則として、その日付けの順序に従って物語を進めるのであるから問題は無いが、1日で終るものの、空間、時間ともにずれる個々の戦闘をどのように物語として構成するかが課題で、そこに語り手の技量が発揮される。それは、個々の英雄の戦闘を並列的に積み重ねて展開するもので、いわば“and”で結んで行く。そして合戦の大わくは、東の生田、西の一谷にはさまれる横長の土地を舞台とし、そこへ中央の山の手から判官義経らが奇襲をかけ、平家を南の海へ追い落とすというものである。これが物語展開の基本構造である。

ここで注目したいのは、この戦闘の前哨戦である部分の順序である。その経過をたどると、

- ① (三草山の合戦後) 資盛が八島へ落ちる。
- ② 教経と通盛の兄弟が、手ごわい山の手防衛の任を承って待機する。
- ③ この間判官の一行が鶴越へ向う。
- ④ 熊谷父子と平山が集団戦を嫌って抜け懸けしようとして一谷の西へ向う。
- ⑤ 生田の陣で河原兄弟が突入、その討死をきっかけとして、⑥ 梶原父子が

源平闘諍録	四部本	延慶本	覚一本
1 三草合戦 資盛、八島落ち	1 三草合戦 資盛、八島落ち	1 三草合戦 資盛、淡路落ち	1 三草合戦 資盛、八島落ち
2 教経、通盛と共に 山の手守備	2 教経、通盛	2 教経、通盛	2 教経、通盛
3 判官、鶴越へ	3 判官	3 判官	3 判官
4 熊谷一二の懸け	4 熊谷	4 熊谷	4 熊谷
5 河原兄弟討死	5 河原兄弟	5 河原兄弟	5 河原兄弟
6 梶原、二度の懸け	6 梶原	6 梶原	6 梶原
7 判官、坂落し	7 判官	7 判官	7 判官
8 教経、淡路落ち	8 教経	8 教経	8 教経
9 盛俊、討死	9 盛俊	9 盛俊	9 盛俊
10 敦盛、討死	⑭重衡	⑪忠度	⑪忠度
11 忠度、討死	15 知盛	⑭重衡	⑭重衡
12 成盛、討死	⑪忠度	15 知盛	⑩敦盛
13 師盛、討死	⑬師盛	⑩敦盛	12 業盛
14 重衡生捕られ	⑩敦盛	⑬師盛	⑮知盛
15 知盛、逃げのび	12 業盛	⑯通盛	⑬師盛
16 通盛、討死	16 通盛、討死の報	⑫業盛	16 通盛
17 小宰相入水	17 小宰相	⑮知盛、後悔 17 小宰相	17 小宰相

二度にわたって敵陣へ討って入る。

⑦ 判官が、一谷の側面、山の手から奇襲をかける。いわゆる坂落しである。

⑧ 日頃、武勇を以て知られた教経もかなわず八島（淡路）へ落ちる。

以上で一つの区切りをなし、ここまでは、諸本の間で順序に大きな異同が無い。しかし以後、敗走する平家公達と、これを追う東国武士の動きを語る段になると諸本は順序に異同を見せる。そして結びとして、せっかく平家が状況を良くし、今一步で京都へと迫りながら、大敗を喫したという思いを抒情的に語るのであるが、あの教経とともに山の手を守っていた通盛が⑯討死したことを語り、合戦の結びと併せてその通盛が同行していた北の方が悲嘆のあまり身投げしたことを語り、併せてその生前の通盛とのなれそめを回想する。武将の戦闘について、その武将のなじみの女性との話を語るのが軍記

物語の一つの型である。<sup>(註4)</sup>

この間に幾人かの小英雄が登場し、物語はその行動を語るなのであるが、その武勲談の語り方は、

(a) まず各英雄の武勲談を以てそれぞれ一応の完結をはかる。すなわち、

○さてこそ熊谷、平山が一二の懸をばあらそひけれ（一二の懸）

○梶原が二度のかけとは是也（二度の懸）

○（盛俊との一騎討ちで）猪俣小平六則綱がうったるぞやとなのって、其日の高名の一の筆にぞ付たりける。（盛俊最期）

と、それぞれの武勲談を結んでいる。

(b) 次に、一谷と生田の両陣を保とうとする平家と、これを海へ追い落そうとする源氏の、集団同志のぶつかり合いを大わくとしながら、物語が語るのは、個々の英雄の意志とその行動である。すなわち、

③ 判官の山の手からの奇襲が戦況を切り開くことになるが、物語は、この判官の進撃の過程で、○関東育ちの平山武者所が、「傍若無人」にも、土地の事情を全く知らないはずの鶴越への道案内をかって出る。歌人が歌枕の吉野や長谷の桜を和歌を通して知るように、武士たる者、敵の城への案内ができぬはずがないと言う。○続いて別府小太郎が山に迷った時は、韓非子のお話に倣い、老馬を先に立てよと進言する。さらに○弁慶が、この山中に住む鷲尾父子を連れ来たり、道案内をさせる。このように、平山、別府、弁慶と鷲尾の行動が判官の一行を支え、これら小英雄の行動があって判官の一谷坂落しが実現することになる。

④ 熊谷と平山の先陣争い（「宇治川」にも同類の話がある）が、両軍の戦いのきっかけを作る。

⑤ 河原兄弟の、わが身を犠牲にしての攻撃と、その壮烈な討死が梶原父子の攻撃をひき出す。以上が前半で、

(c) この源氏の攻撃を受けとめる平家公達の動きが、物語の後半を構成する。古態本では、平家公達を討つ源氏の小英雄たちの、恩賞目当ての、いささ

かどぎつい行動を武勲談として語るのだが、琵琶法師が語る物語では、語り手は、視点を、討たれる平家公達の側にすえ、それぞれの結果を語る。すなわち、

⑨ 盛俊は、一たん降服した猪俣小平六則綱にだまし討ちにあう。

⑪ 大力・早技を以て知られる忠度は、岡部六弥太と組みながら、虚をつかれて岡部の童に右腕を切り落され、覚悟の討死をとげる。

⑭ 重衡は、乳人に裏切られ、むざむざ生け捕りの身となる。

⑮ 知盛は、子息を見殺しにして、やっとのことで逃げのびる。

これら公達の行動を、語り手は、心ある人々とともに感嘆し、非難するのである。時には、敵・味方の別を越えて公達の行動に讃嘆を惜しまない。この点、宗教の違いもあって、敵・味方の別が厳しく、敵に対する憎悪の念の強いヨーロッパの武勲談とは著しく異なる。それは、戦闘そのものが海に囲まれ、単一民族からなる日本の国内の戦闘であったからであろう。

この一谷合戦の中⑩「敦盛」の場合について検討してみよう。一たん海上にある味方の船にたどりつくかに見えた敦盛が、関東武士の熊谷直実に、“返せ”と呼ばれ、進んでとって返し討たれるという話である。

一谷合戦に関する限り、諸本の間で、英雄たちの武装に大きな違いは無いのだが、この敦盛の場合は例外である。例えば古態本の一つ、四部本は、

修理大夫経盛最愛の末子無官<sup>ないふ</sup>大夫敦盛は練絹摺らせたる萱葱草の直垂に  
櫛勾の鎧にて葦毛なる馬に乘たりけるが、

それなりに美しいが、寛一本は、

ねりぬきに鶴ぬうたる直垂に萌黄の勾の鎧きて、鋏形うったる甲の緒しめ、金作りの太刀をはき、切斑の矢おひ、滋藤の弓もって、連銭葦毛なる馬に黄覆輪の鞍をいてのったる。

とかざり立てる。それは若い、大将クラスの武装の定型を用いた語りである。語り手は、敦盛をこの合戦談の主役にふさわしく再構成している。古態の四部本が、この敦盛が浜辺へとって返すのを、

新中納言が游がせたる馬の船に着き玉ふを見て海へ打入レ玉ひケレども

馬弱く游がざりケレば力及ばずシテ引返シ玉ふ

つまり馬が弱いのでたどりつけず、やむなくひっ返したとするのであるが、  
覚一本は、功名をあげようと待ち構えていた熊谷直実に、

まさなうも敵にうしろを見せさせ給ふものかな。かへさせ給へ。

と呼ばれて、自らとって返すのである。この一谷合戦の場合、海上へ落ちようとする公達が、東国武士の手にかかって討死をとげるというのが基本的プロットである。事実、四部本では、味方の船にたどりつこうとして叶わず熊谷の手にかかることになるのだから、基本的プロットを残している。この基本形をどのように具体化して行くかが語り手の技量なのであるが覚一本は、敦盛の行動を美化し、それゆえにその物語の主役にふさわしく武装をも仕立てた。それに、この敦盛の覚悟の死が、その討手である熊谷のその後の生き方をも決定することまでを語るのである。

熊谷に組み敷かれた敦盛が、直実に名を問われる。しかしその場では名らない。

なんぢにあふてはなのるまじゐぞ。なんぢがためにはよい敵ぞ。名のらずとも頸とて人にとへ。みしらうずるぞ。

のことば通りで後日、敦盛と知る。この後日名が判明するという形は忠度に類例があり、その型を利用したものである。

それに、このように武將同志が組み討ちする場合、ただちに相手の首をとるのが基本型であろうが、この直実は一たんためらう。それは、あっぱれ大将と思った相手が、見れば、わが子の直家と同じ、16、7才の若侍であった。その直家が、この前、「一二の懸」で

うす手おひたるをだに、直実は心ぐるしうこそおもふに、此殿の父、うたれぬときいて、いかばかりかなげき給はんずらん

と、わが身の体験から相手の父（経盛）の嘆きを思いやる。これが直実の決断をにぶらせるのである。一谷合戦の構成が並列的な積み重ねであることを前に指摘したが、この「敦盛」の場合、単なる and によるストーリーではなく、「一二の懸」と、この「敦盛最後」との間にプロットを構成していると

えるだろう。

直実は、この迷いから、一たん敦盛を助けようとするが、運悪く味方の兵が近付くのを見て、敦盛ののがれようのないことを悟り、同じことならわが手にかけて討ち、

後の御孝養をこそ仕り候はめ

と言う。武士の身に生まれたため、不本意にも相手を討たねばならないつらさ、この直実の悲しみを一層かきたてたのが、敦盛が腰に指していた笛である。その前夜、決戦を前に城内に笛を吹く者がいた。そのあるじこそ、今、わが手にかけた敦盛であった。戦場では、父子の情をも押し殺さねばならない武士の身の上、しかもその手にかけた相手が戦場にも笛を放さぬ若い公達であったことが直実に出家を決断させる。この直実が出家したのは事実である。しかしその真相は、関東ではよく見られる一族内の所領争いであったことが、<sup>(註7)</sup>明らかにされている。物語の語り手は、見て来たように、敗軍の将、敦盛のいさぎよい態度、それが直実にとってわが子と同年輩の若侍であること、しかも戦場に管絃をたしなむ人であったことが、直実のその後の人生を決定したと語るのである。単なる武勲談ではない。発心談がらみの英雄談を語るのが『平家物語』である。

以上、一谷合戦の中の一こまを検討したにとどまるが、一見、平板に見える英雄像の積み重ねながら、実は、個々の話が定型（基本形）を破り、各人各様の悲劇的な武勲談としてこれを再構成するのが、語り物としての『平家物語』である。言いかえれば、これらの英雄の行動が物語を進めて行くのである。そして、物語全体の流れよりも、その個々の小英雄の行動を完結的に語るのが、日本の叙事詩としての軍記物語の典型、『平家物語』である。

なお、ちなみに、世阿弥が、やはりこの笛を重視して「敦盛」の曲を構成していること、『平家物語』の異本が、この直実の、敦盛およびその父経盛への思いを更に発展させて、この直実が敦盛の遺骸と武具、それに笛をも添えて経盛に送り返したこと、経盛がその好意を謝して礼状を返した。その兩人の書状をものせている。覚一本に見るような物語の“読み”が、これら能や



物語の異本を再構成させたのである。

## 注

- (1) 物語の表現に内在する、見せかけの作者、語り手（Narrator）の意である。
- (2) 寿永3年2月7日の条に見える。忠度らは、討死もしくは生け捕りとして名を列挙されるのみである。
- (3) 杉本圭三郎氏「能登守教経をめぐる——『平家物語』の人物像——」（『日本文学誌要』30号 昭和59年8月）
- (4) 山下「太平記と女性」（『軍記物語の方法』昭和58年8月）
- (5) 山下「軍記物語の様式性と覚一本平家物語」（『平家物語の生成』昭和59年1月）
- (6) 現実には、四部本もこの後、敦盛の若さを知った直実の迷いを語る点、覚一本と大差は無いのだが。「基本形」の用語は、説話考察のための仮説的用語である。
- (7) 諸注釈が注するように、建久3年11月のこととして『吾妻鏡』が記録する。
- (8) 延慶本や百二十句本に見られる。

## 討議要旨

西尾光雄氏から、武勲を述べるのに、熊谷直実の例文にあるように、事実の断定は「…ぞ…ける」、「とぞ聞えし」が普通であって、最後の「こそ哀れなれ」のように批評的断定は「こそ」を使うようになっていっていると思うが、いろいろな武勲でもそうではなかろうか、とコメントがあり、

また福田座長から、王朝文学では「き」「けり」の区別が論ぜられているが、軍記では、「…ぞ…ける」「…ぞ…し」などについて論ぜられているであろうか、また、覚一本の熊谷の発心譚はフィクションであるが、それは古態にもあるのかと質問があり、

発表者から、そのような詳しい研究はまだないようである。また発心譚ははじめからあると回答があった。

小西氏から、王朝の美も、新古今の歌など、それが失われる頃になってかえって誇張されたように、英雄も、武士の生き方が失われるようになってかえって大英雄として描かれるようになるということは、外国の叙事詩でもあのように思われるのいかかがであろうか、と問題提起があり、

発表者から、私もそのように思想史的面から考えて来たが、最近はまだ逆に、以前にもあったものがはっきりしてくるのが平家物語の実体ではないか、という面からも考えることを試みていると発言があった。

西氏から、西洋では敵、味方の党派的立場が強いとのことであるが、ニーベルンゲン・リードなど悪役のハーゲンも公平に扱われていて必ずしもそうでないように思うが、敵を党派的に落しめるような作品としてどのようなものがあるか、と質問があり、

発表者から、ローランの詩などでは、キリスト教に対する異教徒には厳しく、徹底的に悪く扱われていると思う。ニーベルンゲンなどではその背景に共通の民族的なものがあるのかも知れない。と回答があり、西氏からも、ニーベルンゲン・リードにはキリスト教以前の異教的性格があることは論じられておりその通りであろうと思うと同意があった。